

2015
32号
10.15

しん じゅ 新 樹

前橋市男女共同参画情報誌

情報誌「新樹」は、水と緑と詩のまち前橋をイメージし、男女平等の葉が青々と茂るようにという願いを込めました。

前橋市のホームページからでもご覧になれます

前橋市 新樹

検索

前橋市 HP→市政情報→参画・協働・交流→男女共同参画

★地域で取り組む男女共同参画 天川（文京）地区編 … P.2、3

第1回市民活動表彰受賞 文京地区「生きがい塾」
女性自治会長 木村 美代子さんに聞く



「生きがい塾」主催のイベント風景

★平成27年度第1回男女共同参画基礎講座

瀬谷 ルミ子さん講演 …… P.4、5



▶平成27年度第2回 男女共同参画基礎講座

瀬地山 角さん講演
……………P.6、7



●海外レポート・LGBTってなに？・編集後記 …………… P.8

この情報誌は、市民ボランティア編集委員と前橋市が協働で作成しました。

前橋市男女共同参画センターではDVやパートナーとの関係等でお悩みの方の相談を受け付けています。

☎027-898-6520（相談室） 平日9:00～16:00

※面接相談は、お電話で予約のうえお越しください。

地域で取り組む男女共同参画 天川（文京）地区編

性別にとらわれない 協力体制

文京町、天川町、天川原町から成る天川地区（文京地区とも言う）は前橋駅の南東部に位置する地域です。地域内には、二子山古墳等の史跡、県立文書館、県立生涯学習センター等の文化的施設、大型商業施設も含み、積極的な地域活動が行われています。

第一回市民活動表彰受賞 文京地区

「生きがい塾」

お話をうかがった
皆さん



35年の歴史と実績

今年で35年の歴史となる「生きがい塾」は社会福祉協議会と老人会が生涯学習として立ち上げ、生涯学習奨励員など多くの方々の支えにより、今日に至っています。会員数は天川地区（8自治会）在住の205名、年齢は50代から90代と幅広く、全体の半分近くは男性会員となっています。

多彩で充実した講座の数々



生涯学習奨励員はじめ役員が前年から企画会議を行い、5月から10月の間に10回の講座を開催。人気があるのは音楽や健康、歴史です。

今年度も開校式の後に音楽講座として、田島芳子先生指導の下『みんなて歌おう♪』がありました。懐かしいメロディーにのせて、会員の皆さんはとても楽しく歌っています。

健康講座では専門家の健康予防対策の話や、健康体操があります。若いトレーナーさん達の指導による『健康体操』は、日頃の運動不足が解消され、人気があります。

歴史講座は、近くに県立文書館が

あるので、その先生が1年おきに講師となり、地域の歴史を教えてください。

ここは二子山古墳などもある、古い歴史ある地域ですが、住民の皆さんでも知らないことが多く、地域の歴史を学ぶことで、地域への愛着がますます深まります。

その他にも生きがい塾の会場となる、県生涯学習センターの中にある『プラネタリウム体験』や、科学館を利用した『大人のサイエンス』はお子さん向けと同じような内容なので、とても分かりやすく、実験もあり、楽しく学べます。また、消費生活啓発員さん達による寸劇『悪徳商法に気をつけろ！』や落語、アートの話など皆さんに役立ち、楽しめる講座が盛りだくさんです。

地域の会員を増やす

年2回のオープン講座

オープン講座とは会員以外の方々にも参加していただくことのできる講座です。「生きがい塾」のPRや会員募集にもなります。特に男性は歴史が好きな方が多いので歴史講座を入れることで、男性会員の呼び込みにもつながっています。

【天川（文京）地区データ】
（H27年8月末日現在）

住民数	10,707名
構成	
男	5,127名
女	5,580名
65歳以上	2,955名（全住民の28%）
75歳以上	1,511名（全住民の14%）



▲『ハワイアンバンド』で常夏のハワイアン音楽とフラダンスを堪能しました

今年のオープン講座は手島仁先生の『初代県令・榎取素彦と花燃ゆ』と、福田一彦とサウスシーアイランドの『ハワイアンバンド』でした。

お楽しみの研修旅行



「生きがい塾」の中で皆さんが楽しみにされているのは、10月にある視察研修旅行です。今まで上毛カルタ巡りで、県内の東毛、西毛等の名勝や史跡等を見学してきました。『富岡製糸場』も世界遺産に決定される前に行きました。「生きがい塾」で勉強したことや、視察旅行に行った所がTVなどで話題になることが

多く、先取り感があり、今後の学びにも皆さん期待を持っています。

今年の歴史探訪は武田信玄ゆかりの地、山梨です。ぶどうの産地山梨ではワイン工場見学でお楽しみを試飲もあると思いますが、あくまで研修旅行なので、バスの中でのお酒と、温泉立ち寄りのご法度です。

地域の人の元気の源

お話をうかがった皆さんからは「男性は今まで仕事人間で地域とはあまり関わりを持たずに来てしまった人が多いですが、生きがい塾は地域の人と知り合うきっかけとなり、とても良い交流の場になっています」

「女性も家庭にいと、雑用が多くじっくり話を聞くということがないので、講座を聞きながらノートを取ることが新鮮で、脳の活性化や知識も広がります」

「講座が終わった後の11月には清掃活動を行い地域の美化運動にも協力しています。いつまでもきれいで住み良い町にしていきたいですね」

「昨年から名称の中の『高齢者教室』を取り、『文京地区生きがい塾』と改めました。シニアの皆さんだけでなく、幅広い年齢層の方々が参加することで、生きがい塾の輪が地域に広がっていくと思います」との感想をいただきました。

35年の歴史は男性が参加しやすい仕掛けづくりなど、地域を愛するアイデア満載の企画からきているのではないかなと思いました。

(取材・記事…奈良)

女性自治会長

(文京町三丁目)

木村美代子さんに聞く



群馬の女性は、現在様々な分野で活躍しておりますが、女性自治会長数となると、平成26年4月時点でわずか8名。これは全国で最下位です。(1位の高知県は398名)

8名のうち2名が、前橋市の自治会長です。今回はそのうちのお一人文京町三丁目、就任2年目の木村美代子さんをお訪ねしました。お忙しい中、インタビューに答えてくださいました。

Q 会長に就任したきっかけや運営について

婦人会活動から婦人部長、さらに自治会副会長をしておりましたが、前会長が退任された後を引き継いだだけで、特別なことは何もないのです。

就任後は次々と行事や仕事に追われて今までやってきました。ただ皆さんの協力体制がとても良く、円滑な自治会運営がし易かった、ということでしょうか。

ことに第五中学校の皆さんが活発にボランティアとして地域活動に参加してくれること、天川地区の地域づくり協議会の積極的な協力や、元気で熱心な長寿会の皆さんなど、地域の各団体の応援や支え合い体制ができていますからでしょう。

Q 活発な自治会活動の背景や文京町三丁目独自のものは

文京地区はもともと教育関係者であつた住民も多く、学びへの意欲が高かったと言えるでしょう。

第五コミュニティセンターでは、踊りや歌、お花や囲碁、俳句などの他、グラウンドゴルフ、輪投げや卓球なども盛んです。

また、貴重な歴史文化遺産としての二子山古墳の公園愛護会があり、月1回の町民の清掃の他に、ヘメロカリスの花を植えるなど、公園の管

理を行っています。お花見会や、秋には子ども達を集めて栗拾いもしています。



Q 女性自治会長としての感想は

男性が気付かない女性の目線から若いお母さん方に心配りができるということはありますが、あとは特別なことは何もありません。応援してくださる良い方たちに恵まれました。家族も重い荷物を運んでくれるなど協力してくれたり、労わってくれます。周りの人たちに支えられながら今日までできました。

「特別なことは何もないのです」淡淡と爽やかな微笑みを浮かべておっしゃる木村さん。格別気負うこともなく、自然体で自治会長職をこなしている木村さんに、男女共同参画の本来のあるべき姿Ⅱ性別にかかわらず、人間として当たり前に社会や組織に参加し、平等に運営に参画することⅡを見る思いがいたしました。

(取材・記事…佐々木)

「紛争地に生きる選択肢を 平和構築という仕事」

講師 瀬谷ルミ子さん 日本紛争予防センター（JCCP）理事長



世界の紛争地を舞台に平和構築に携わっている瀬谷さんは、桐生市（旧新里村）出身。母校が県立前橋女子高校で、アイツ前橋の評議員もなされ前橋にとつて縁の深い方です。今回、紛争地の人々への救援活動や表面に出にくい女性達への支援についてお話して頂きました。

1枚の写真で世界の現実を知る

私は、世界中の紛争地で起こっている問題を、平和に導く仕事をしています。

この仕事を志したのは、進路をどうするか迷っていた高校3年生の時に見た1枚の新聞写真がきっかけでした。

それはアフリカのルワンダの難民の写真でした。起き上がる力も無くなった瀕死の母親と瘦せた幼児の写真に衝撃を覚えました。

1994年ルワンダでは、約100日間におよそ50万人から100万人の大虐殺が起こり、大量の難民が発生していたのです。

記事でルワンダの実態を初めて知りました。自分にはルワンダの難民に比べ、たくさんの選択肢がある。

その時初めて、自分自身の意思で人生を決められる幸せを実感しました。

できることなら、こうした難民を助ける仕事をしたいと決心したのです。そこで大学を卒業した後、海外の大学院で紛争地の問題解決を学びました。

識字率の低さが扇動から暴動へ

日本は戦後70年ずっと平和でした。しかし、世界のあちこちでは紛争や戦闘状態が頻発し、数百万から1千万の人が亡くなっていると言われています。

なぜ世界中の途上国で紛争が起こるのでしょうか。私たちは先進国に住んでいても意見の違いなどで対立したり、けんかになったりします。しかし、最悪の場合は、裁判で解決する仕組みがありません。でも世界の

かなりの地域では、対立解決の仕組みが整っておらず、暴力や紛争にまで発展するケースが多いのです。

途上国で対立を生む原因の一つが「選挙」です。「選挙」では「敵」をつくります。識字率が低いため、ネットはおろか新聞も読めない人が多く、過激なキャンペーンで対立があらわれます。

例えばケニアは、約50の民族を持つ多民族国家です。もともとは共存していたのですが、「選挙」の際「君たちが貧しいのは、あの部族の仕業だ!」といった扇動にのって騒乱が始まりました。貧しい若者が「敵」を示唆されて過激化し、部族同士の暴力事件にまで拡大したのです。

戦闘が収束しても、後始末が大変です。食料や家といった物質的な支援も大事ですが、精神的なケアも重要なのです。近所同士で略奪や放火、さらに殺し合いもありますから、お互いに傷つけ合った隣人同士が、その後どう暮らしていくのか。そうした支援も行っています。

今後の課題は、事前に暴動や騒乱に繋がる兆候を見逃さないことです。騒乱には兆候があります。大虐殺のあったルワンダでは、ラジオのDJが、他の部族をゴキブリ呼ばわりし始めた。早く店じまいする。異なった部族出身の夫婦が別れてしまう。そういった現象が起きていました。しかし当時国連もいたのですが、騒

乱に繋がるこれらの兆候をキャッチ出来ず、結果、大虐殺事件が起きてしまったのです。

戦後の日本の歩みは紛争地の希望

日本は、世界の紛争地のためにどんな支援をしているのでしょうか。私たちのような活動や、お金の支援は当然ですが、それとは別に日本のあり方自体が、紛争地に生きる人の励ましになっているのです。

何故かという、戦後の日本は、海外と戦争したことがない。中東やアフリカで攻撃する側になったことがない。復興支援でも日本政府はあまり注文を付けない。海外の紛争地に行くと、こうした日本は、とても良い印象をもたれているのです。

また、走っている車は日本製、お



▲瀬谷さんの活動報告に多くの市民が耳を傾けた

金のある人はソニー製の電気製品を使っています。豊かな先進国というイメージがとても強いのです。

彼らの日本についての興味は、第二次世界大戦で廃墟^{はいきょ}になったのにな、どうやって復興したのか、ということとです。再度戦争をせずに、豊かさを獲得した日本の歩み自体が、紛争地の貧しい人々の希望となっているのです。

人を育て、自立できる手助け

紛争問題の背景に、民族の対立や過去の怨念^{おんねん}があります。紛争の再発を防ぐには、対立する部族が和解しなくてはなりません。和解は必ずしも「仲良し」にならなくてもいいと思います。殺し合いにならなければいい。それほど紛争の傷跡は深いのです。

根本には貧困があります。何年も戦争が続くと、勤労意欲を忘れてしまっています。そのため、ただ援助するだけでなく、仕事をして報酬を得ることを教える必要があります。私たちは、まず後片付けとゴミ集めの仕事を提案しました。地区ごとの競争になり、連帯感と仕事をする充実感が得られたようです。

私たちJCCPは、現地の人を育てることを主眼にしています。まず安全に暮らすために、武装解除が必要です。そのため、武器の買い取りなどを行います。次に治安を担う人

を育てる。さらに最低限の生活ができる食料を確保する。その上で、援助がなくても自立できるような仕事と、それを担う人を育てることです。最終的な目標は、私たちのような支援組織がいらなくなることです。紛争地の問題が解決し終われば、私たちの活動は必要ありません。その地域の人々が、自立できる社会に復興させることが、国際社会にとっても大きな目的なのです。

女性支援は文化背景の理解から

女性に対する支援は、私たちの活動の中で大きなシェアを占めています。ただイスラム教の国では、女性問題が見えにくい。女性は男性が守るものだ、女性は学校に行く必要がない、といった伝統もあります。



▲ソマリアにて 現地NGOに対し、治安情勢分析のためのデータ収集の訓練を行っている

ソマリアには避難民がたくさんいますが、家庭内暴力も多いのです。家財を失った夫が、ずたずたになったプライドを回復するために、妻に暴力を振るうといったケースがたくさんありました。

文化的な背景から、女性が被害を訴えること自体が、とても勇気のいることなんです。そのため、女性のための相談窓口を設ける訓練をしました。現地スタッフに、女性から事件や問題を上手に聞き出す教育をしました。

「女性の地位を守ろう」といった先進国的な価値観だけでは、現地ではなかなか受け入れてくれません。文字が読めない人のためにわかりやすく説明する。文化の違いを踏まえ、一般の男性でも納得できるような説得が必要なのです。

今の自分にできること

こうした世界の紛争地域の問題をお話すると、皆さんの中には、あまりに重すぎて無力感に陥ってしまう方もいます。私もそうでした。でも、内容の大小を問わず、一人の人間ができることは、必ずあるのです。

紛争地の支援活動をする人の中には、会社を退職した方も参加しています。大手企業の経理のベテランだった方は、経理のやり方を現地の団体に教えたり、IT企業のシステムエンジニアだった方は、データ

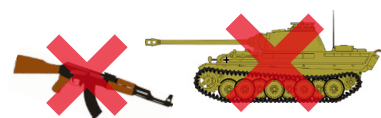
ベースのシステム化を指導したりなど、専門性を生かした仕事をしています。

日本に住んでいる私たちには、生きるだけで精一杯の難民と違い、人生の選択肢が数多くあります。私たちには自由があるのです。しかし、選択肢は豊富でも、それぞれに賞味期限があります。今可能でも、5年後10年後には難しいこともある。一方で50代、60代でもできることも多いのです。「今の自分にできることは何だろう?」とよく考えて、これからも活動していきたいと思っています。

(取材・記事：高坂)



▲ケニアの国内避難民の子どもたちと



JCCP

(Japan Center for Conflict Prevention)

特定非営利活動法人
日本紛争予防センター

HPアドレス
<http://www.jccp.gr.jp/>

「笑って考える少子高齢化社会」



講師 瀬地山 角さん せちやま かく 東京大学大学院教授

東大の超人気教授が、ご自身の子育て体験を交え、楽しく分かり易く少子高齢社会についてお話してくださいました。

個人的な話を少しだけ

子どもの母は在日韓国人。上の子はアメリカで生まれたため、日本・韓国・アメリカの三つの国籍、下の子は日本で生まれたので日本・韓国の二つの国籍を持っています。うちは子ども2人で世界の人口を5人増やしました（笑い）。

さて、上の子連れて帰国後は保育所探し。探し回った挙げ句に自分のキャンパスにあったとわかり、これがほんとの「東大（灯台）下暗し」やなあ（笑い）。

おかげで10年半、送迎をし、発熱時も私が対応、夕食の仕度も担当。2度目のアメリカ留学は10歳の娘と行き、父子家庭も経験しました。

子育てで男にだけへんことはない

出産は確かに女性しかできません



が、子育てで男性にだけへんことありません。よく母乳がどうたらと言いますが、子どもはハンガーストライキとかしません。腹が減ったら何でも飲みます。

要は、一緒にいる時間の長さや質の問題です。普通のお父さんは週末に子どもと公園に行くんですけど、私は週末の講演には、子連れでいろんな所へ行きました。そんな積み重ねで信頼関係ができたと思っています。

「社会的性差（ジェンダー）」

ここまでの個人的な話は、実は、「生物学的性差」と「社会的性差」を区別してくださいという話なんです。

人間には生まれついての「生物学的性差（セックス）」があります。一方、社会通念や慣習の中には、社会によって作り上げられた「男性像」、「女性像」があり、このような男性、女性の別を「社会的性差（ジェンダー）」といいます。

つまり、私たちが男だから、または女だからこうせなあかと考えることの大半は、生物学的に決まっているものではなく、社会的に人が決めたことに過ぎない。そうだとしたら人と人とが相談して変えていくことができるはずですよ。

あるいは、世界の様々な社会と歴史には、今の日本社会とは違う「ジェンダー」のあり方があり、今の日本がすべてではない。そこには変えていく選択肢がいっぱいある。そういうことが「ジェンダー」という言葉を獲得したことでわかるようになった。それが「ジェンダー」という視点を持つていたある種の破壊力なんです。

少子高齢社会の選択肢は3つ

少子高齢社会で働く人を増やす政策は3つしかないんです。①高齢者に働いてもらう、②専業主婦に働いてもらう、③外国人を導入する。しかし、日本社会では③に対して寛容になるとは思えません。すると①と②の問題を考えていかなければなりません。

「60代は働く社会」を考えよう

高齢社会を乗り越えるには、みんなが働く社会を作ることです。高齢社会が来ない方法が一つあります。

2015年の65歳以上の高齢者は26・8%。この高齢者の定義を段階的に70歳以上にすれば高齢化は進まなくなります。これは毒のある提案で、年金支給年齢を70歳に上げる話なんです。しかし、いずれ議論が始まります。だから、60代は働く社会というのは考えなきゃいけないんです。就職先は、例えばシルバー人材センターなどです。

専業主婦の現在と将来

2014年の婚姻件数を100とすると離婚件数は35でした。つまり35%。17年連続で3割超です。結婚がゴールの人生設計はほんとに危ない。永久就職して死語なんです。

ここに主婦の地域的分布と主婦の階層的分布という資料があります。

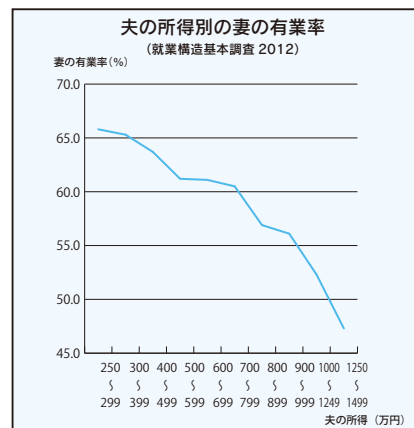
資料1・2から専業主婦は関西と

資料1 都道府県別妻の有業率

共働きが多い	順位	共働きが少ない
山形 71.6	1位	奈良 50.9
島根 71.5	2位	大阪 52.5
福井 71.5	3位	神奈川 53.2
鳥取 70.9	4位	兵庫 54.4
富山 70.8	5位	埼玉 56.0
高知 70.5	6位	東京 56.4
石川 69.5	7位	北海道 56.8
新潟 69.0	8位	福岡 57.7
宮崎 68.0	9位	京都 58.2
秋田 67.9	10位	宮城 59.1

2010年国勢調査夫就業世帯の妻の有業率（%）

資料2



関東の政令指定都市に多く、また、夫の所得が高いほど専業主婦が多くなるという特徴が見えます。夫が高所得で妻が専業主婦の場合、税金を還付する今の制度は、社会政策上の合理性を欠いています。

男性の家事・育児、少なすぎ

しかし、主婦が就業するための問題は男性の側にあります。資料3は2011年の「社会生活基本調査」を元にした表です。

こうした男性の著しく短い家事時

資料3 夫・妻の家事関連時間
(週全体平均1日当たり)

	夫	妻
共働き世帯	39分	4時間53分
専業主婦世帯	46分	7時間43分

6歳未満の子をもつ夫・妻の育児時間
(週全体平均1日当たり)

夫	妻
37分	195分

間は、もはや「社会的に」問題にすべき問題です。1975年の食品会

社CMの「私作る人、ぼく食べる人」から40年経ち、最近のCMには、働く母親が仕事と家事の両方を健気にやるストーリーのものもありました。父親が子どもの着替えを手伝う場面を入れてますが、そもそも家事は手伝うものではありません。

少子化は「女性」の問題やない！

例えば、植林をしない林業者と植林をする林業者とが、市場で競争すると、植林というコストをかけない林業者が安値で絶対勝ちます。この「植林」を「子育て」と置き換えてください。企業がどうして男ばかりを採用したがるのでしょうか。

6歳未満の子の育児時間のデータから、女性にのみ子育て負担が多くなっていることがわかります。そのため企業はコストのかかる女性の採用はひかえてしまいます。その結果、「植林をしない林業者」＝「男性」ばかり雇うことになります。

日本の企業は長い間そういう行動をとってきました。これでは日本中がはげ山になる。これが少子化という現象です。少子化の社会は、「人が普通に働きながら普通に子どもを育てることができなくなっている社会」なのです。

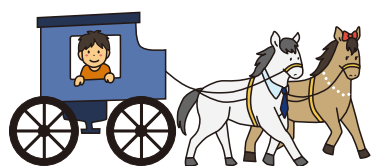
だからこそ男性のワークライフバランス

だから、男性の仕事の仕方が問

題。男性が家事育児に普通に関われる社会でない限り、普通に子育てはできません。育児休業をとる男性が増えています。せめて「夫の産休」ぐらい制度化、いや「慣習化」できないでしょうか。

忌引は労働基準法にはありません。厚労省では、あれは社会的に認知された休暇というそうです。私は、家族の誕生と死以上の大事件はないという気がします。だから、夫の産休だって忌引と同程度に社会的に認知されてもいいのではないのでしょうか。

馬車は2頭立てに



父ちゃんが馬車馬のように働いて、母ちゃんが後ろからむち打って、荷台に子どもが2人くらい乗っているという、1頭立て馬車体制というのは高度成長期に成立したものです。日本の女性の就労率が一番低かったのは、国勢調査で1975年。高度成長期に女性の働く割合は下がり続けました。男性はサラリーマン、女性は専業主婦になる時代だったのです。あの頃は年率10%の経済成長で、夫の稼ぎが上がり続けました。

今は給料が毎年下がるかもしれ

へんという状態でしょ。1頭立ては「荷物」が重すぎます。父ちゃん600万円で母ちゃん専業主婦よりも、400万円ずつでも2人で正社員、つまり2頭立て馬車の方が豊かに生活できるはず。そうするには、夫が家事育児に参加しなければなりません。互いに2時間ずつ分担したらやれます。「みんなが働く社会」は「みんなが家事育児を共有する社会」です。

男女共同参画って？

戦後の婦人問題は80年代に女性問題と言われるようになり、1994年から男女共同参画という言葉が使われるようになりました。「性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮することができる社会」(男女共同参画社会基本法前文)にある「性別にかかわらず」という表現が重要です。「男女の特性を尊重して」というような言葉が入ったらこの法律は終わりです。

日本社会は国際的には後進国です。男らしさ、女らしさという見方から自由になることで肩の荷を下ろせることがあります。皆で、新しい社会を構築していきましょう。

(取材・記事…池田)
※要約の関係で随所にあつたお笑いの箇所は割愛しました。



海外レポート ～ 地球あちこち見て歩き ～

船で地球一周した、編集委員の池田榮一さんのレポートを掲載します。

番外編



海・国境なき世界

船旅は3分の2の時間が海上生活でした。太平洋・インド洋・大西洋上では、来る日も来る日も視界360度が全て海。その青い大円盤の表面に白い航跡が引かれています。

私は毎日デッキに出て、海を眺めていました。たとえば晴れの夜明け。水平線上の空が真っ赤に染まり、金隈取りに雲が光ると、やがて輝く光の球がゆっくり昇ってきます。地球の自転速度を実感します。太陽が水平線を離れると、急速に赤色は薄らぎ、空も海も青々とした昼の色へと変わっていきます。夕方はこの変化が逆転します。この日々のスペクタクルは、何度見ても飽きることがありませんでした。

海は陸地面積の約2.4倍、平均水深は3,729m。船の下には、水圏という巨大な世界が広がっています。大洋航行中にも海面に様々な生命体を見つけます。船内では、クジラやイルカ、亀、クラゲ、魚などの目撃談をよく耳にしました。

私も昼、カメラを持ってデッキで待ち構えますが、なかなか出会えません。ところが、何の用意もない時に限って突然現れます。インド洋では遊泳するクジラ、北太平

洋では乱舞するイルカの大群を見ました。彼らは遠い昔から何千kmもの大海原を遊泳しています。それは種の存続のためでしょうか。

海には彼らの命を支える多くの小さな命が存在し、それらが食物連鎖と呼ぶ生命のネットワークになっています。食うか食われるかという関係性は、全ての生物が負う宿命ですが、ひたすら殺す・殺される関係性ではありません。海は自然の厳しい世界ですが、全体的には種の存続を維持する共生の世界です。

この海という国境なき世界に生きるものの目になって、陸上に生きる人間世界を考えてみることは、なかなか面白い視点の転換ではないでしょうか。



▲北太平洋のイルカ

LGBTってなに？

人間の性を〈体の性〉〈心の性〉〈恋愛対象〉の3つの視点で考えると、「男性の体で、男性の心を持ち、女性を愛する」、「女性の体で、女性の心を持ち、男性を愛する」人が多い社会の中で、そうした枠にとらわれない生き方をしようとしている人達を、セクシュアルマイノリティ（性的少数者）と呼んでいます。

その中にはLGBTの人達（L: レズビアン＝女性同性愛者、G: ゲイ＝男性同性愛者、B: バイセクシュアル＝両性愛者、T: トランスジェンダー＝体と心の性に違和感を持つ人）もいます。

性のあり方は豊かで多様です。人と違うことは特別なことではありません。「みんなちがって、みんないい」ということです。

2015年4月1日に、東京都渋谷区で同性カップルを、「結婚に相当する関係」と認めるいわゆる「同性パートナーシップ条例」が施行されるなど、少しずつ理解が広がっています。

性の多様性を認めあい、誰もが自分らしく生きられる社会を目指したいものです。

（記事：福島）

編集後記



◎瀬谷さんの「戦後の日本の歩みは紛争地の希望」は、いい話でした。日本ブランドといえる戦争をしない国の国づくり方法を紛争地に広げたいですね。

《池田 榮一》

◎瀬谷ルミ子さんの講演で、世界の紛争地域の多さや、難民の生活再建の大変さを再認識しました。紛争地の女性支援は、日本の異文化共生の参考になると思います。

《高坂 均》

◎自治会長という重責を担い、精力的に活躍される木村美代子さん。気負う事もなく、爽やかな笑みを浮かべて穏やかに語る木村さんに群馬の女子力を感じました。感動！

《佐々木信子》

◎生きがい塾にかかわっている皆さん、男女問わず楽しそうで、エネルギーに満ちていました。興味を持って皆で学習する事が、元気の源なんですね。

《奈良かほる》

◎多くの方に性の多様性を知ってもらい、性的マイノリティについて考えていただければと思います。もしかしたら、身の回りの人の相談相手になれるかもしれません。

《福島 美音》

発行日：平成27年10月15日 編集：「新樹」編集委員

発行：前橋市生活課 男女共同参画センター 〒371-0023 前橋市本町一丁目5-2 職員研修会館1F

直通電話：027-898-6517 FAX：027-221-6200 メールアドレス：sankaku@city.maebashi.gunma.jp

《新樹32号のご意見・ご感想をお待ちしています！》

新樹第32号・2015年10月15日 8